

E 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてH Bの黒鉛筆またはH Bの黒のシャープペンシルで記入することになっています。H Bの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにH Bの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	0	0	●	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

晩年「林家彦六」を名のつた八代目林家正蔵は、名刺の肩書にあたるところに「はなし噺家 俗に落語家という」と印刷していた。

その真意は？と訊ねると、次のような答えが返ってきた。

噺には六つの種類がある。

「落し噺」

「人情噺」

「芝居噺」

「怪談噺」

「音曲噺」

「地噺」

このすべてを演ずることができて、初めて「噺家」といえる。

「落語家」というと、このうちの落し噺だけのように思われるのが心外だから、私は「噺家」という呼び方にこだわる。

落語の演目をどのように分類するかには、いろいろな考え方があつて、一概にはいえないが、この「彦六の六分類」は、演者の側から見たものとして、十分傾聴に値すると思われる。

噺は、まず「落し噺」と「人情噺」に大きく二分できるとしてみよう。

「落し噺」は、滑稽な筋があつて、最後にオチがつく典型的な落語。「子ほめ」とか「粗忽長屋」「饅頭こわい」などなど。

「人情噺」は、滑稽だけをねらうのではなく、人物・情景の描写に重きをおき、喜怒哀楽すべてにわたつてしみじみと人情に訴える噺。そこには複雑な人間関係があつたり、時にはミステリーの絡むようなものもある。したがつて「真景累ヶ淵」とか「怪談牡丹燈籠」などのように、長い続き物のかたちをとる傾向がある。かりに一席物であつても、「文七元結」や「お若伊之助」などのように、いわゆるオチがついていないことがしばしばある。

歴史的にみて、落語の本来のなかたちが「落し噺」にあることは動かしがたいだろう。初めのうち「おどけ話」「軽口ばなし」などと呼ばれていたものが、オチに重きをおかれるようになって「落し噺」になる。漢語風に「落話」「落語」と表記されても、ヨミは「オトシバナシ」だった。それが広く一般に「ラクゴ」と読まれるようになったのは、明治時代中期以降のことともいわれる。

焉馬中興のころは、なお、「小咄」すなわち短い、キチに富んだ「落し噺」が主流だったが、初代可楽以降、寄席の定席興行が定着するようになると、ひとりの真打が、ひと月なり半月なりの興行の間、毎晩トリを勤めるのに、落し噺だけでは a ない。続き物人情噺なら、話がクライマックスにかかったところで「さてこれからいかが相成りますか、明晩のお楽しみ」とヤマをかけて、お客を次の日も引き寄せることができる。かくして幕末の江戸の落語界では、「人情噺」でなければトリを取れないという慣習ができていくようになった。

では、何が「落し噺」で、何が「人情噺」なのか？

六代目圓生は、明快に「オチがあれば「落し噺」です」と言っていた。

その説に従えば、「鯉沢」「芝浜」「たちきり」などは、立派にオチがあるから「落し噺」ということになる。一方で「文七元結」や「お若伊之助」などは、いわゆるオチはなく、切り口上で締めくくられるから、人情噺だというわけである。

この圓生式区分はたいへんわかりやすいが、噺の結末部分のみを問題にしているので、「滑稽噺」と「人情噺」に区分する場合には応用できない。また、例えば、もともと役者の出世噺でオチのなかった「中村仲蔵」に、六代目圓生も、八代目正蔵も、それぞれ工夫してオチをつけているが、この場合、理屈としては「落し噺」にカテゴリーを変更しなければならなくなる。

そもそも「落し噺」VS.「人情噺」という対比がそぐわないのではないか。

オチがあるかないかは、①の問題なのに対し、人情噺かどうかは、噺の②に関わるものだからである。

「人情噺」に対比させるなら「滑稽噺」だろう。ただ、「滑稽噺」は大部分がオチのある噺だから、「落し噺」を「滑稽噺」と同義に使って対比していることが多いのだとも考えられる。生物学の分類ではないので、そこは多少あいまいでもやむをえない。

一方の極に、落語の中枢部分である「落し噺」がある。その対極に「人情噺」があつて、これに本来の続き物のかたちをとる「長編人情噺」と、「一席物人情噺」がある。さらにそのなかに「オチのあるもの」「ないもの」がある、と考えれば、なんとか収まりがつくのではないだろうか。

ところで、彦六分類のなかにある「芝居噺」と「怪談噺」とはどんなものだろうか。まずは、「芝居噺」について。

噺がひと晩で終わらず「明晩に続く」ことによつて、観客の興味を持続させようとしたのが、幕末・明治の寄席の長編人情噺。初めは扇一本舌一枚の素噺だった人情噺が、やがていろいろな趣向を凝らすようになった。なかでも、噺の一部分を歌舞伎芝居の真似で見せる演出が隆盛をきわめた。その特徴は次のようなものである。

- ・高座に書割の背景など大道具を飾る。
- ・芝居掛かった下座音楽やツケが入る。

・せりふが芝居掛かりになり、時に役者声色が入る。
・見得を切る、立ち回りや衣裳引抜きの型を見せる。

当時庶民第一のゴラクは芝居見物だったが、本当の芝居見物となれば、まず一日仕事で費用もかかる。寄席は、晩飯をすませてから出かけて、安い木戸銭で一夕を愉しむことができる。そこであたかも芝居の一場面を見ているように、つまり歌舞伎のミニチュアを演出してみせたのだから、大いに人気に b。圓朝も燕枝も、若手真打売り出しのころは、競つて大道具鳴物役者声色入りの芝居噺を演じ、評判を取っている。

とりわけて圓朝は、「正本芝居噺」と銘打って、さまざまな工夫を見せた。ひとつふたつ例をあげてみよう。

『菊模様皿山奇談』では、歌舞伎の石川五右衛門でお馴染み「山門」の場面を模したもの。芝居の場合は山門の大道具がせり上がるが、寄席ではそれは不可能なので、山門を描いて細くたたんだ背景の道具（タプロ）を、徐々に引き上げるのに合わせて、噺家が正座から中腰になり、やがて立ち上がって、大道具とともにだんだんとせり上がったように見せる。

また「緑林門松竹」の「新助市——原の郷捕物の場」では、長屋の壁を描いた背景大道具が前へ倒れると、真ん中に穴があいていて、噺家の上半身だけが抜け出たかたちになる。引窓（明かり取りの天窓）から上へ出て、屋根伝いに逃げるさまを示して幕切れになる……など、面白い工夫がある。

こういった圓朝の演出は、門人の一朝を経て、八代目正蔵へと受け継がれ、現在はその門人の林家正雀が継承している。

このほかに「本水」（本物の水）を使う噺もあったそうだ。

高座の前に水槽を据えておき、登場人物がそこへ飛び込んで逃亡するという演出。あるいは、高座の前端に雑巾を敷いて、その上方に吊した竹樋に水を入れておき、竹樋の向きを変えることで、ところどころにあけた小穴から水を降らせて、雨のように見せるといった仕掛けもあったという。

以上は、幕末から明治にかけて大成された江戸・東京系の大道具鳴物入りの芝居噺のことである。上方落語に

も、お囃子のたつぷり入る芝居噺はあるが、大道具や仕掛けを用いた特殊演出は、ほとんどみられない。

怪談噺は、さらに特化したもので、噺の筋のうえで殺された人物が幽霊になって出てくるくだりになると、場内を暗くして、前座が扮したお化けを徘徊させ、お客を怖がらせたあげく、お定まりの「ハテ恐ろしき執念じやなア」というせりふとともに、パッと場内を明るくして、「今晚はこれぎり」と打ち出すのが標準のかたちである。

これも幕末に大流行、正月から大晦日まで怪談ばかりを演じる「怪談師」というものまで現れ、「寄席の怪談噺」として独自の発達を遂げた。

怪談師にとつて、必要不可欠なのが、前机と立て龕灯。前机は一見するとただ真つ黒な机のようだが、中に仕掛けがあつて、赤や青の色の光で怪談師の顔を照らす。龕灯は、辞典によればへ銅またはブリキで釣鐘形の外枠を作り、内に蠟燭立てが自由に回転するように作つたもので、それを高座の両側に蠟燭立てのように立てておくのが立て龕灯。

さて、噺がカキヨウにさしかかると「これより明かり直し」と声をかけ、まず高座の蠟燭を龕灯の中へ落とし込んで、光を消す。続いて客席も消灯し、暗闇のなかで、限定された照明を使いながら噺を進める。

もうひとつ特徴的なのが幽霊で、前座などのアシスタントが、おどろおどろしい面をかぶつたり、幽霊の装束を着込んだりして、高座や客席に出没する。この幽霊役を寄席の符牒では「ユータ」という。

さすがに明治末には、この怪談師の系譜は途絶えたが、怪談噺の衣鉢は伝えられ、近年では、彦六の正蔵、講釈畑で七代目一龍齋貞山が得意にしていた。今もその系統の怪談噺は、林家正雀や一龍齋貞水(注1)によって伝承されている。

(山本進『落語の履歴書』による)

(注) 1 八代目林家正蔵——芝居噺・怪談噺を得意とした噺家(一八九五—一九八二)。

2 焉馬——鳥亭(立川)焉馬(二七四三—一八二二)。江戸落語中興の祖。

3 初代可楽——初代三笑亭可楽(二七七七—一八三三)。「江戸席亭元祖」とも呼ばれる。

4 六代目圓生——六代目三遊亭圓生(一九〇〇—一九七九)。人情噺を得意とした噺家。

5 ツケ——舞台を強く印象づけるために拍子木等で板をたたいて音を出すこと。

6 圓朝——三遊亭圓朝(一八三九—一九〇〇)。「落語中興の祖」あるいは「近代落語の祖」とも呼ばれる。

7 燕枝——初代柳亭(談洲楼)燕枝(一八三八—一九〇〇)。道具入り芝居噺を得意とした噺家。

8 一朝——三遊亭一朝(一八四七頃—一九三〇)。

9 林家正雀——八代目林家正雀(一九五一—)。

10 七代目一龍齋貞山——講師(一九〇七—一九六六)。

11 一龍齋貞水——講師(一九三九—)。重要無形文化財保持者(人間国宝)。

問

(A) 〓〓〓〓を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 〓〓〓〓の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 空欄 a にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 さしきれ ㉞ おいきれ 3 つめきれ 4 もちきれ 5 わりきれ

(D) 空欄 b にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 昂じた 2 長じた 3 投じた 4 応えた 5 肖った

(E) 空欄 ①・② には、どのような言葉を補つたらよいか。対になる言葉をそれぞれ漢字二字で記せ。

(F) ~~~~~部について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 「怪談噺」は「人情噺」の特徴である喜怒哀楽の表現を特に重視し、特別な演出方法を発展させた。

2 「怪談噺」は噺の内容に合わせた演出上の工夫を特に発展させ、一定の様式が見られるまでになった。

3 「怪談噺」は特定の地域で好まれる演出方法を特に発展させ、その土地土地に独自の発展を遂げた。

4 「怪談噺」は限られた時期にのみ見られる特別な演目として、他の芝居噺とは異なる発展を遂げた。

5 「怪談噺」は演出上の工夫が凝らされた結果、噺の内容よりも演出自体を楽しむものへと発展した。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「噺家」という肩書きには、先達の創意工夫で豊かに発展した芸能の担い手としての自負が現れている。

ロ 「人情噺」は視覚効果の面白さで観客を惹きつけたものの、その結果、落語としての色合いが薄まった。

ハ 彦六の分類は曖昧な所があるものの、噺家自身が演目の特徴をどう見ていたかを示しており興味深い。

ニ 芝居噺は歌舞伎芝居を容易に見に行くことができな庶民の嗜好をうまくつかみ、上方でも演じられた。

ホ 落語はまず「滑稽噺」と「人情噺」に区分でき、それぞれについてさらに続き物と一席物とに区分できる。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

「カタル(語る)」は、語源的には「カタル(象る)」に由来すると言われている。それでは何を象るのかと問われれば、「経験」と答えるのが最も適切な応接であろう。言葉はわれわれの経験に形を与え、それを明瞭な輪郭をもった出来事として描き出し、他者の前に差し出してくれる。本人にのみ接近可能な私秘的「体験」は、言葉を通じて語られることによつて公共的な「経験」となり、伝承可能あるいは蓄積可能な知識として生成される。「語る」という行為は、人と人との間に張り巡らされた言語的ネットワークを介して「経験」を象り、それを共同化する運動にはかならない。柳田國男が「話のカタルにも元は多数の参加、知識の共同の意味があつたのかと私は思う」と述べているのも、そのような意味に受け取られるべきであろう。

ところで、「経験」という概念は、哲学的文脈においてはこれまで極めて乏しい内容をしか与えられてこなかった。とりわけ「経験主義」を標榜する哲学者たちは、経験を瞬間的な「感覚的知覚」あるいは五官による「感覚(注2)と与件の受容」とのみ解してきた。そこに欠落しているのは、一つは経験を経験たらしめている時間的広がりあるいは文脈的契機に対する理解であり、今一つは経験を構成するに当たつて不可欠の役割を演じている言語的契機に対する認識である。前者の要件については、藤本隆志が剴切な説明を与えてくれている。彼によれば、「経験」を表すインド・ヨーロッパ語系の言葉は、例外なくその語根が何らかの対象を「通り抜ける」という意味をもっている。 [a] 日本語の「経験」もまた、同様に「た験しを経る」という意味を備えている。 [b]、「経験」とは、ひとが何らかの嘗試(注4)を通り抜けることから、あるいはそれを通り抜けることにおいて、獲得されるものと古今東西の人々がちゃんと了解していたこと」が知られるのである。以上のような考察に基づいて、藤本は経験概念を次のように敷衍する。(a)

さて、このように理解された経験概念の下では、ただ単に感覚していたり、知覚していたりすることはそれ

だけでは経験といえない。自分で行為してみても、その結果を知覚すること、言わば自己の行為とその結果との非可逆的な因果関係を通り抜けることによって、はじめて経験が成り立つのである。言い換えれば、経験は少なくとも二つのことからの関係了解であつて、單項的な一つのことからの認知（知覚）よりも一段とレベルの高い認識なのである。

ここで述べられているのは、経験とは瞬間的な感覚や知覚ではなく、「自己の行為とその結果との非可逆的な因果関係を通り抜ける」という時間的広がりの中で獲得されるものであり、それは「関係了解」⁽¹⁾という文脈的理解に支えられているということである。因果関係の了解は、当然のことながら、その都度の行為の場面で完結し、忘れ去られるわけではない。それは記憶の中に蓄えられ、次に同種の行為を行う際に際しては、それを規制する一種の規範として機能することであろう。俗に「経験豊富な人」⁽²⁾と言われるのは、そのような規範を数多く身につけ、それを状況に応じて適切に利用できる人の謂である。

そのような経験は「語る」ことを通じて伝承され、共同化される。やがてそれは「生活世界」の下層に沈澱することによつて、われわれの行為を制約する「生活形式」へと転化するであろう。つまり、「経験」の反復によつて獲得された規範が、沈澱を通じて間主観化されることにより、逆に「経験」を可能にする条件へと転成を遂げるのである。

ここで、経験を伝承し共同化する言語装置をわれわれは「物語」と呼ぶことができる。経験は「物語行為」を通じて伝統に連らなり、それによつて歴史的経験としての厚みと広がりとを獲得することができるのである。先にわれわれは、経験主義的な経験概念の**狭隘**^(b)さを批判しつつ、経験の構成に言語が不可欠の契機として参与していることを指摘したが、それを改めて述べ直すならば、「経験は物語られることによつて初めて経験へと転成を遂げる」と要約することができるであろう。

それでは、経験を「物語る」とはどのような言語行為なのか。それを解明する上で一つの手がかりとなるのは、

(注⁵)
A・ダントーが提起した「物語文 (narrative sentence)」という概念である。まずは彼自身による物語文の定式化を見ておこう。

これらの文の最も一般的な特徴は、それらが時間的に離れた少なくともふたつの出来事を指示するということである。このさい指示された出来事のうちに、より初期のものだけを（そしてそれについてのみ）記述するのである。通常それらは、過去時制をとる。

物語文は、少なくともふたつの時間的に離れた出来事を指示し、そのうちの初期の出来事を記述する。しかしこの構造はまた、ある意味で通常行為を記述するのに用いられるすべての文に現れている。

ここで注目しておかねばならないのは、物語文が時間をヘダてた二つの出来事を指示すること、それは過去時制で語られること、そしてそれは行為を記述する文一般の特徴であること、この三点である。これらのメルクマールは、先にわれわれが確認した「経験」の成立要件、すなわち自己の行為とその結果との間の関係了解という特徴づけとも合致する。それゆえ、われわれの経験の記述は基本的に物語文という形式に則してなされると考えてよいであろう。

例えば、「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という戦争の自慢話を取り上げてみよう。これは典型的な物語文である。ここでは「奇襲作戦の提案」および「味方の勝利」という二つの出来事が指示され、時間的に先行する前者がその後を生じた後者に照らして記述されている。奇襲作戦の提案はそれ自体ではいまだ「経験」の記述とはならない。それは無謀な作戦として上官に退けられるかもしれないし、また酒席の冗談として仲間から無視されるかもしれない。それは味方の勝利というもう一つの出来事と関連づけられることによって、優れた提案としての評価を受け、「物語る」に値する経験となるのである。

(野家啓一『物語の哲学』による)

(注) 1 柳田國男——日本の民俗学者(一八七五—一九六二)。

2 感覚与件——色・形・音・匂い・味など、解釈や判断を加えられる以前の直接的な経験のこと。

3 藤本隆志——日本の哲学者(一九三四—)。

4 嘗試——ためしてみることに。

5 A・ダント——アメリカの哲学者(一九二四—)。

6 メルクマール——指標、目印。

問

(A) 線部を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 空欄 a・b にはそれぞれどのような言葉を補つたらよいか。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてはならない。

- 1 にもかかわらず
- 2 所どころか
- 3 それゆえ
- 4 なぜなら
- 5 たしかに

(D) 線部(1)について。これは具体的にはどのようなことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 自分の行為をその結果との結びつきにおいて理解すること。
- 2 自分の行為の結果を変えることができないと理解すること。
- 3 自分の行為が一瞬で終わるのではなく時間的な広がりをもってしていると理解すること。
- 4 自分の行為が特定の歴史的文脈に条件づけられていると理解すること。
- 5 自分の行為が特定の規範にしたがっていると理解すること。

(E) ——線部(2)について。ここで述べられている「経験豊富な人」の例として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 交通法規を数多く記憶していて、交通違反をせずに正しく運転できる人。
- 2 よく魚が釣れた気象条件をいくつも記憶していて、同じ条件の日に釣りに出る人。
- 3 世界各地への旅行で得た経験をともに、それぞれの風習について巧みに話せる人。
- 4 繰り返しを通して、意識しなくても工場での流れ作業ができるようになった人。
- 5 多くのデータを参照することで、正確な気象予報を行うことができる人。

(F) 左記各項のうち、経験と物語の関係についての筆者の主張と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 人々が繰り返し語るうちに、経験は伝承に値する物語へと洗練されていく。

ロ 既存の物語の筋書に則って語られることによって、経験は理解可能になる。

ハ 経験は、繰り返し物語られなければ、記憶から忘れ去られてしまう。

ニ 物語という媒介によって、経験を他者と共有することが可能になる。

ホ 特別な経験だけが、物語として共有され伝承されるようになる。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 柳田國男は、経験主義的な経験のとらえ方を否定している。

ロ 「経験主義」の立場をとる哲学者は、経験の時間的広がりを重視していた。

ハ 「生活形式」とは、共有された経験が人々の行為の制約となったものである。

ニ 物語文は、経験を記述するために適切な形式ではない。

ホ 「私たちが宴会をしていた時、私は奇襲作戦を提案した」は物語文である。

三 左の文章は、『発心集』所収の一説話で、ある高齡の尼が語つた身の上話を記している。これを読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の關係で引用のカギ括弧を省いたところがある。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

申頃、年高き尼の、さすがに人に知られて乞食こつじましありくあり。我が身の有様、みづから語りけるは、「もとは四(注1)条の宮の半者(注2)、みなそことなん言ひける。男の受領(注3)になりて下りける時、具して下らんといざなひければ、宮にも暇(1)申し、候ふ人々にもその由聞こえて、心ばかり出で立つ。おほやけにも旅の装束給はせ、女房なども、おのおの扇、畳紙たたかみやうの餞はなむけ、あまねく志しけり。すでに曉(2)とて、重ねて事の由聞こえて、里に出でつつ迎への車を待つ程に、その日、音信おとづねもなし。あやしめて、もし下り延びたるかと尋ぬれば、「はやこの曉下り給ひぬ。北の方(4)の日ごろはそら知らずして、この夜中はかり、「ただあらましかとこそ思ひつれ。まことには我をおきて、誰を具して行くべきぞ」とむつかり給ひつれば、やがて、北の方もるともに下り給ひぬ」と言ふ。悪心おこるなどは(注4)おろかなり。人のまつ思はんことも心うければ、その後、宮へも参らず、やがてその日より清まはりして、貴布(注5)禰(6)へ百夜参りして、申し侍りしやう、我おだやかにて、人を悪しかれと申さばこそは、かたからめ。かの人を失ひ給へ。我が命を奉らん。もしなほ生けらば、乞食する身となりて、後世(注6)には無間地獄に墮つる果報を受くるとも、それをば憂へとせず。ただこの憤りを助け給へとなん、二心なく申し侍りし。この男は、ただ面目なくなんどばかり心苦しく思ひやりて、さほど深く思ふらんとは知らざりけり。国(注7)に下り着きて、一月ばかりありける程に、かの北の方、湯殿におりたりける時、湯の気の中へ、天井(注8)の中より下(注9)沓履きたる足の一尺ばかりなるをさしおろしたるが見えければ、女房に、「かれは見るや」と問ひけれど、こと人には見えず。かくて驚き恐れて、湯も浴みず、騒ぎのぼりにけるより、やがて重く煩ひて、程なく失せにけりとぞ。京には、いまだ百日に満たざりし程(注10)に聞きて、心の内の悦(注11)び、申しつくすべからず。その後、とかく事たがひて、世にあるべくもなく衰へて、果てには、かく乞食をしありき侍るなり。ともすれば、罪深く恐ろしき夢など見え侍れど、さしも申してしことなれば、さら(注12)に恨むるにあらざる侍る。かくいたく老いせまりて後こそ、なにしに罪深くさる悪心をおこして、

二世不得の身になりぬらんと思ひかへし侍れど、かひもなし」とぞ言ひける。^(注10)

(注)

- 1 四条の宮——藤原寛子。後冷泉天皇の皇后。
- 2 半者——雜役などをして仕える女。
- 3 男——尼(みなそこ)のかつての夫。この男には他に正妻格の妻(北の方)がいた。
- 4 受領——国司のうち実際に任国に赴いた者。
- 5 あらまし——実行するかどうか不確かな、思いつきの計画。
- 6 清まはり——神事を行う前に、心身のけがれを清めること。潔斎。
- 7 貴布禰——貴船神社。京都市左京区に現存。
- 8 無間地獄——絶えることのない極限の苦しみを受ける地獄。
- 9 下沓——沓を履くときに用いる布製の履き物。
- 10 二世不得——現世で安穩が得られないとともに、来世の往生からも見はなされること。

問

- (A) 線部(あ)～(お)のうち、——線部と同じ意味用法で用いられている「の」を一つ選び、記号で答えよ。
- (B) 線部(1)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部(2)の具体的な内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
 - 1 夫が受領になったことの報告
 - 2 夫の任国に旅立つという挨拶
 - 3 餞別をもらったことへのお礼
 - 4 牛車で迎えに来るといふ約束
 - 5 夫がすでに出発したといふ噂

(D) 線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 気づかないふりをして
- 2 わからないままできて
- 3 漠然としか知らなくて
- 4 事情が了解できなくて
- 5 何とも承服できなくて

(E) 線部(4)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 夫に対する腹立たしさを覚えたことは言うまでもない。
- 2 夫に対する恨みを感じるのはいかたの悪いことである。
- 3 北の方をのろう心が生ずるといった程度ではすまない。
- 4 北の方をにくむ心がわきおこるのは罪深いことである。
- 5 夫の言葉を信じた自分を嫌悪してみても手遅れである。

(F) 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 複雑なので
- 2 冷淡なので
- 3 恨めしいので
- 4 不可解なので
- 5 つらいので

(G) 線部(6)の現代語訳を十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(H) 線部(イ)・(ロ)は、それぞれ誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なもの一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

- 1 尼(みなそこ)
- 2 宮
- 3 男
- 4 北の方
- 5 貴布禰の神

(I) 線部(7)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ふつうの人
- 2 親しい人
- 3 すぐれた人
- 4 無能な人
- 5 ほかの人

(J) 線部(8)とはどのような夢であると推測されるか。その具体的な内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 死んだ後に地獄に堕ちて苦しむ夢
- 2 誰かが自分のことをのろっている夢

3 貴布禰の神への祈りがかなわない夢

4 夫から見放されて離縁される夢

5 ひどく落ちぶれて物乞いをする夢

(K) ——線部(9)について。尼(みなそこ)が神に「申し」た言葉を引用した部分を、本文中から探し出し、初めの三字を記せ。ただし句読点は含まない。

(L) ——線部(10)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 かえつて

2 少しも

3 いよいよ

4 深く

5 今さら

【以下余白】

